

02

インタビュー

## 増村十七

物語の円滑な語り口で、この現実を拡張したい。

特集

05

## 生き抜くための手芸

06

「インタビュー」手芸文化と近代日本

——社会にはたらきかける「一針一目」の抗う力。／山崎明子さんに聞く

12

縫い、編む、刺す、わたしたちの「抵抗」／かなな

16

パレスチナの刺繍が灯す誇りと希望／北村記世実

17

「あなたの名前を忘れない」キルトの力／寺口淳子

18

『編むことは力』がもたらしてくれたパワー／佐久間裕美子

連載

キッチン菜時記／飛田和緒

きのうのあしもと、あすの空／文＝黒田美法 絵＝鈴木千佳子

真宗と大拙と私／池田向一

唯信鈔文意を読む——唯念仏のころ／山田恵文

出会いの真実——嘆仏偈を読む／宮下晴輝

ペコロスのほどけてしゃがんで／岡野雄一

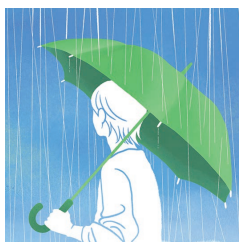
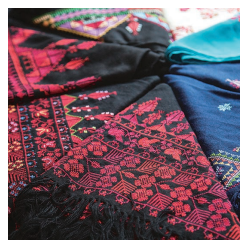
息でさる風景／森泉岳土

歌壇／永田淳 俳壇／安原葉

同朋のひろば



©増村十七／朝日新聞出版



表紙絵

北村人

絵本作家&amp;イラストレーター

39 36 34 32 30 27 26 24 22

54 53 50 48 46 44 42 41 40

仏事作法のひとつこま／近松誉

どうぼうパズルdeひとやすみ

録音から立ち現れる 東本願寺の「音景」／柳沢英輔

古写真でつづる東本願寺

あなたのとなりの僧侶

哲学者と僧侶／谷川嘉浩

一切の幸せ／作＝岩川ありさ 絵＝惣田紗希

生きづらいこの世界でも／竹田ダニエル

日々平熱のソウル／中田亮



移民の主人公が「地球(ここ)にいていいのかな」と述懐する場面(『バクちゃん』第2巻)  
©増村十七/KADOKAWA

## 物語の円滑な語り口で、 この現実を拡張したい。

語なので単純に楽しい話にはできない。でも、『ドラえもん』のような丸みを帯びたキャラクターなら自分の感情を込められるように思い、主人公を「バク星のひと」にしました。だから『バクちゃん』は社会問題を扱いながら、個人的な「つらいぞ」という気持ちも表現した作品です。ただ、今読むと自分でも「危ういな」と批判的に感じたり、葛藤はありま

す。あくまでもひとつの例として読んでほしいです。  
——この作品の後、21年3月には、スリランカ出身のウイシユマ・サンダマリさんという方が名古屋入管で亡くなる事件もありました。  
本当に「どうして」という感じで、入管を擁護する言葉は全くありません。入管に収容されている方に面会する機会があつて、待合室にローマ

### 自分の「つらいぞ」も 物語に乗せて

——影響を受けたマンガ作品は？  
親が『ブラック・ジャック』とかは

字で「ここ地獄」と落書きされているのを見ました。もう消されていると思いますけど、無力感もあり、言葉が見つからないです。

### 現実と物語、 双方向の挑戦のうえで

——どんな読者をイメージしていますか？

ベースは自分の子ども時代ですね。お金もなく、毎日古本屋などで立ち読みをしつづけ、近所のコンビニを2軒出禁になったほどでした。だから、読者にはどこか無力なイメージがあつて、手に取ってもらう以上「マンガってこんなに面白いのか」と感じてほしい。マンガは読者の脳内で映像として再生されて完成すると考えているので、やはり読者は大切です。

語り口は可能なかぎり円滑にしたのですが、かといってリラクゼーションのために描くわけではない。読者に多少負荷をかけても、嗜好や現実を拡張したい気持ちもあります。そもそも新しい表現って基本的に読者に負荷をかけるんです。マンガでウソをつくことは読者から借金する



「天才」じゃない棋士たちの生活を描く『花四段といっしょ』第2巻より  
©増村十七/朝日新聞出版

## 増村十七 (マンガ家)

日本のマンガでは珍しく、移民が直面する苦難を描いた『バクちゃん』。多種多様な将棋界をテンコ盛りのギャグで魅せる『花四段といっしょ』。新進気鋭のマンガ家は、いかに社会を見据え、どんな思いを創作にかけるのか、尋ねました。

持っていて。昔は大人が読むマンガって結構決まっていたように思います。手塚作品には公害の問題とか、学生運動や右派のやくざの話もあり、少し背伸びして読む印象でした。プロになった今読んでも勉強になります。  
——いくつかの作品の後「面白いと感じるものを全部詰め込もう」と『バクちゃん』を発表。カナダに一時移住した経験などを元に移民の現実を描く作品です。

デビューは10年以上前ですが、本当になしの礫で。「もうどこでもいいや」とカナダに。最低時給の仕事をしつつ2年ほどいましたが、全然つらくて。帰国後、当時の経験を表現しようとする、移民労働者の物

ようなもので、増額して返金する必要があるというか。たとえば、少年マンガで主人公の武器がムチだと読者は「男らしくないな」と思うかもしれない。でも、ムチならではの面白さを物語上で加味できれば、読者の現実を拡張する好機になる。つまり、負荷があつてもさらに面白いものを提示できれば、世界に対する新しい視点を提供できるんです。

もつと言うと、移民や外国人、性的マイノリティの人々には、見てみぬフリをされる現実があります。でも、新たな視点や物語を通して、そういう人々と私たちはすでに共にいる、と描くこともできるわけです。  
——『花四段といっしょ』には女性の「棋士」が登場します。現実には女性で「棋士」になった方はまだいませんが、物語を通して新たな現実を創作するような感覚はありますか？

作家が物語を通して現実にはたらしめかけただけではなく、現実が作家にはたらしめかけることもあります。ちょうど「女性の棋士を描きたい」と考えていたところ、福岡香奈さんという方が棋士編入試験に挑戦するタイミグと重なり、残念ながら福岡さんは棋士になれませんでした

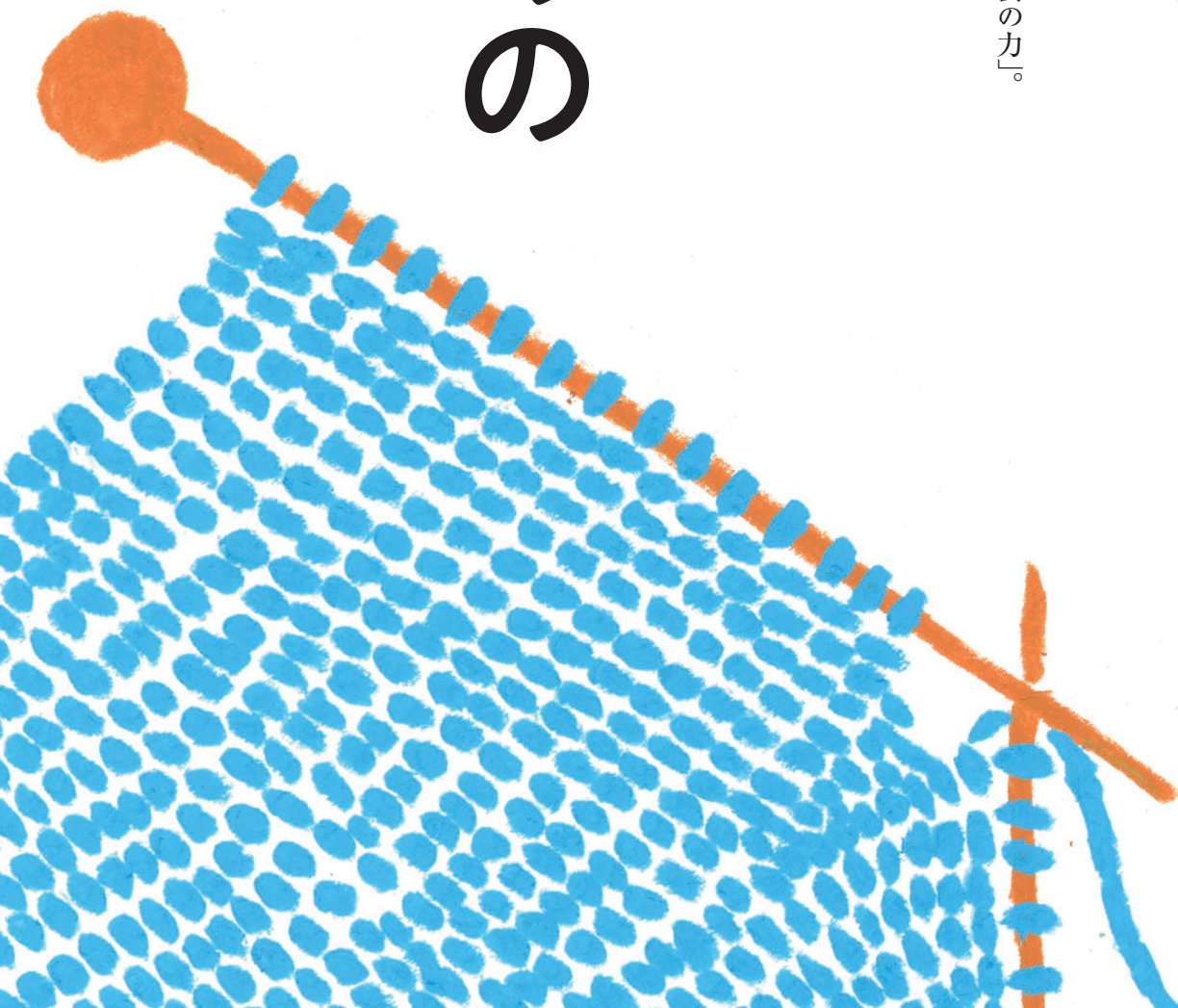
# 手芸

## 生き抜くための

特集



人は昔から、生活用品や衣類、装飾品など身の回りのモノを、縫ったり編んだりして暮らしてきました。また、手芸には、個人の生活や家庭内にとどまらず、フェミニズムや社会運動を支える原動力になってきた面があります。ほころびある社会を編み直す「手芸の力」。あらためて見直してみませんか。



インタビュー

# 手芸文化と近代日本

## ——社会にはたらきかける「一針一目」の抗う力。あらが

美術史研究者 山崎明子さんに聞く

### 美術の枠組みから外された「手芸」

——ご著書の『ものづくり』とジェンダー格差（人文書院）では、近代から現代までの「ものづくり」、特に「手芸」という営みに潜むジェンダーの構造について論じられています。

美術史がご専門の山崎さんが、「手芸」を研究テーマに据えられたのはなぜでしょう？

子どもの頃から手芸は好きで、よくしていたんですね。私が子どもの頃に着ていた服はほとんど母が縫ったものでしたし、祖母も手芸をすごくする人で、家にある色んなものに刺繍（しゅう）があしらわれていたんですよ。

家には針も糸も布もなんでもあるから、布の切れ端とか毛糸をもらって、好きなものを好きなように作ってよかったし。縫い方や編み方がわからない時にはちよこつと教えてもらったりして。編み物は小学校にあがる前からやっていた気がします。

あと私はずっと絵を描いている子どもでしたね。祖母は油絵も習っていて、女性画家の絵を何点か集めていました。そうやって手芸や絵画から女性のものづくりの力を感じる機会がすごくあったんです。

だけど大学に行って美術史を学び始めたたら、教科書に女性の画家はほとんど出てこない。高度な技術で美しいものを生み出している人は手芸

の世界にもいっぱいいるのに、美術の枠組みから外されてしまっていて。それはなぜだろうと考えていくうちに、出会ったのが戦前の女子の美術教育でした。

実は戦前は、女性と男性の美術の教科書が別だったんです。女の子の教科書には、お裁縫（さいほう）や手芸がテーマとして出てくるんですけど、男の子の教科書には出てこない。しかも戦後、教育が男女平等になっていく時に、女の子の教科書にあった内容の一部は、家政学の中に組み込まれて編成されていきます。そして、家政学は男の学問じゃないとみなされた時代もあります。このような過程を経て、女の子がそれまで学んでき

た「美術としての手芸」が美術の枠組みから排除されていったというところが見えてきて、自分にとって大事なテーマになりました。

### 「兵士のための仕事」へと置き換えられて…

——ご著書では、戦時下において、手芸の目的が変化していく様相を指摘されています。

戦時下は労働力が圧倒的に足らなかったから、学校で女子学生はお裁縫やミシンを習って、その技術で軍服やパラシュートを縫いました。同時に兵士を慰めるためのお人形や慰問品も作りました。女らしさの象徴

であり、家庭空間を彩るためのもので、社会においてそれほど価値のあるものとはみなされていなかった手芸文化であっても、戦時には「兵士のための仕事」として意味付けが置き換えられることで、必要とされたのです。あるものを活かして創造する女性たちの精神やスキルさえも戦地への想いに還元されていきました。それでも女性たちが手芸を続けたのは、そうすることで自分たちが社会に貢献していると思えたからでしょう。戦地に向かう兵士のための祈りであるのみならず、自分の存在意義を確認する意味もあったのだと思います。

また、物資が乏しい戦時下では、食料にならない花の栽培は相応しくないとされ、それまで手芸の多くに用いられてきた「花」のモチーフが消えていきます。代わって、国家のシンボルであり「戦勝」を祝う「日の丸」や「旭日旗（きょくじゅうき）」、「虎」などが増えていくのです。

戦争と強く結びついた針仕事「千人針」は、一枚の布に赤い糸で千個の玉結びを刺し、戦地に向かう兵士に贈られ、お守りとされました。実

は千人針って女性たちが主体的に連帯した活動なんですね。何もできないと思われていた女性たちが力を合わせて何かをすることができると。

それが誰かのためになって、思いがちゃんと伝えられる。だから駅前の街頭などに立ち、大きな声で「縫ってください。一針ください」と呼びかけて集めたのです。ですが、同時代の男性画家たちによって、女性が家で椅子に座って一人で千人針を縫うという女性像が描かれています。女性たちが連帯して力を持つという文脈は捨象（しやうさう）され、あくまでも無力で祈るだけといったイメージに置き換えられていく。それはすごく残念だなと思いますし、そういう表象によって戦時下の手芸と女性像が作られてきた面もあります。

### 「自分の仕事」を取り戻したアプリケ作家・宮脇綾子

——そんな戦中を生き抜き、戦後の間もない頃、40歳頃からアプリケの手法で創作活動を始めた宮脇綾子さん（1905～1995）は、これからは「自分の仕事」ができる、「目の前



《椿》 宮脇綾子 1945 27・2×36・5 cm／個人蔵

続きは本誌で



「もうひとりも欠けてはならない 怒りと誇りの糸をより わたしたちの針は 正義と平等をもとめぬいあげる」をスローガンに、「政治的な手芸部」で制作した2021年のバナー ©macca

という言葉を並べ、わたしたちの生活にあるものすべて、政治性を脱色することなどできないはずだということ強調したかったからだ。

手芸は無害で個人的な趣味でしかないと軽視され、作家性が低いとみなされてきた。良妻賢母教育、そして戦後も家庭科は女性しか学ばない時代があり、その中で手芸は女性であるがゆえに押し付けられ、強制されるものだった。アジア・太平洋戦争下では千人針は「銃後の守り」、女性が戦争協力に関わる方法のひとつとしてさかんに喧伝され、奨励された。手芸は女性のイメージや、社会の中での立ち位置と無関係ではなく、その手芸をあえて用いることで、その意味を反転させ、社会に抗う手

段とすることを試みている。こうした意図での制作はフェミニズムと不可分で、フェミニズム・アートの分野ではしばしば行われてきた。このプロジェクトもロンドンの編み物グループがSNSに投稿していた、トランプ大統領来英反対のバナーをきっかけに、こうしたものを作りたい！と真似する形でスタートした。

「政治的な手芸部」は2020年から毎年バナーを作成し、今年で6年目となる。かなな、マルリナ、ちひろ、maccaの4名でデザインや、パーツを縫い付ける台布作りなど、制作の運営を行う。2020年は「わたしたちの手はつむぐ、でも口はつぐまない。すべての『わたし』たちの平等のために」、2021年は「もう

2021年のバナーを作るため、15センチ四方のパーツを一字ずつ参加者が縫い合わせた



# 縫い、編む、刺す、 わたしたちの「抵抗」

フェミニスト手芸グループ山姥 かなな



「フェミニスト手芸グループ山姥」という活動をやっている。グループとはいうが、メンバーはかななわたしとマルリナちゃんの2人。友達として遊ぶ延長でゆるく、フェミニズムや、好きな映画や本から着想を得た作品を制作している。自分たちだけでの制作のほか、参加者を募ってプロジェクトを主宰することもある。

そのひとつに「政治的な手芸部」がある。3月8日国際女性デーのデモ行進を歩く際に掲げるバナーを、手芸の手法を用いて制作するものだ。「手芸部」という名前ではあるが、継続的な活動や集まりがあるグループというわけではない。それぞれ

で制作した作品を提出してもらうことがほとんど唯一の活動で、メンバーの顔ぶれも毎年異なるため、その年ごとのプロジェクトと表現したほうが正確かもしれない。それでもこの名称にしたのは、「政治」と「手芸」

ひとりも欠けてはならない 怒りと誇りの糸をより わたしたちの針は正義と平等をもとめぬいあげる」とスローガンを決め、15センチ四方のパーツを一字ずつ参加者が担当した。2022年からは形式を変更し、参加者にはあらかじめ白黒どちらかの色を指定した上で、10センチ四方のパーツを制作してもらい、それをモザイク状に配置して大きな文字を作り、2枚1組となるバナーとした。2022年は「人権」、2023年

は「生存」、2024年は「尊厳」、2025年は「抵抗」の文字を作った。いずれもデモや抗議活動など社会運動の場で使うことを想定し、運営メンバーでテーマとなる言葉を選んでいる。プロジェクトを開始した2020年は参加者が27名だったが、2021年67名、2022年103名、2023年108名、2024年119名、そして今年2025年は122名と年々増え続けている。コロナ下からスタートした企画と

続きは本誌で

# 『編むことは力』が もたらしてくれたパワー

ライター／アクティビスト 佐久間裕美子



今、私のかばんにはいつも毛糸とかぎ針が入っている。地下鉄の中で、病院の待合室で、公園で、隙あらば毛糸と針に手を伸ばす。仕事をしている時、常に膝の上に毛玉がある。執筆に詰まった時、頭を休めたい時、すぐに編むことができるように。不安になると、手が編み物を、毛玉をさぐる。毛糸や針がなかったら、私はこの局面をどう生きていただろうか？

パンデミックが始まって2年目、ニューヨークの山小屋での生活に

そろそろ疲れが出てきた頃、岩波書店の編集者の北城玲奈さんからメールを受け取った。3年後に『編むことは力』というタイトルで刊行されることになる「The Power of Knitting」という本の版權を取ろうとしているが、翻訳しないかという打診だった。初めてのミーティングで、「編み物のことを何も知らない自分よりも適任の人がいるのではないか」と言ったが、さまざまな社会のテーマを横断する本だと言われて読んでみることにした。原書をもらって読み、

さらにはオーディオで聴いた。人民の抵抗の歴史の中で、女性たちの権利拡大の歩みの中で、創意工夫の形として、表現のひとつとして、また人々の心に寄り添い、痛みを和らげるための友として、編み物がどのように歩んできたかを辿るノンフィクションの書でありながら、二度の戦争を生き残り、編み物のレッスンを通じて、社会を見つめ、権威や与えられた物語を疑う目を孫娘に教えた祖母に贈るオマージュ、そして一度は愛し、長年信じた人に裏切られ、どん底

から立ちあがろうとするひとりの女性のエッセイでもあった。私が本書と出会った時は、すでに第一次トランプ政権は終わり、バイデン政権が発足した後だったけれど、国境にたどり着くや否や拘束され、非人間的な扱いを受ける難民申請者たちの姿の記憶がまだ新しい頃だった。この本を通じて、私は、拘束された子どもたちに毛布を編んで送った老女たちがいたことをも知った。著者のナポリオーニさんは、この本の中で、アメリカに持っていた家を処分し

て旅立ち、また長年のハウスキーパーだったマリアさんは、子ども時代からアメリカに住んできた息子が国外退去を命じられたことをきっかけにアメリカを離れるのだった。

その年2021年の夏、私のニュースレターを読んでくれている



佐久間裕美子 作

人がメールをくれた。読者とともに緩やかな集合体として活動するコレクティブを立ち上げた頃で、参加者の得意なことややりたいことをベースに企画を考えていた。何かできることはあるかと聞くと「編み物を教えられる」という答えが返ってきた。『編むことは力』を翻訳する話が立ち上がってはいたが、契約にまでは漕ぎ着けておらず、まだ「起きるかも、起きないかもしれないこと」として頭の中の引き出しに入っていた。

メールをくれたのは、渡辺みなみさんという人で、豪徳寺のmienieという自転車とライフスタイルのショップで働いていた。ちょうどその頃、みなみさんのところに、処分される繊維の話が来ていて、移送のコストを負担すれば譲ってもらえるとのことだった。その繊維はかつて手芸の世界で流行ったことがあるTシャツヤーンという紐状のコットンで、せっかくだから何かにしたいね、とみなみさん

が考えてくれたのがマクラメ編みのワークショップだった。捨てられてしまはずだった素材を、みんなで集まって商品にするという体験は、想像以上に楽しかった。手元で作業をしながらだったら、知らない同士でも気軽に話ができるし、いろいろな場所からやってきた人の人生の話を聞くのも新鮮だった。

冬が来る前、みなみさんが日本で主催する編み会に出席した。みなみさんの指導に従って表編みと裏編みをやった時、「あれ？」となった。棒針編みは初めてだと思っていたのに、手が懐かしい動きを思い出したかのように滑らかに動き始めたのだった。それなのに、どれだけ思い出そうとしても、その前に棒針を握った時のことが思い出せない。いつ誰が教えてくれたのだろう？ 彼女が分けてくれた編み針と、持っていた「ラ・ドログリー」のモヘア毛糸の在庫から、好きな色を少しずつ選んで購

入し、アメリカに持ち帰った。そうやって、編み物は、ダーニングやスクリーン・プリンティングとともに、Sakunag\*のコンテンツのひとつとして、その後、さまざまな場所でオープンハウスをやったり、ブースを開いたりするたびに登場するようになった。気がついたら、私の人生に編み物が必要不可欠なものとして存在していた。

\* Sakunag ... ニュースレターとコレクティブ活動につかっている屋号。

「訳者あとがき」でふれたように、私自身、この本を、その後お別れすることになる山小屋で翻訳した。またゲラの作業をしている時に、自身も乳がんを患い、編み物の癒やしのパワーを思い知った。自分に何が起きていても、世界で何が起きていても、自分の手が動くことで、一目、また一目と、紐が生地状に

続きは本誌で